等身大の神

――シャルリー・エブド襲撃事件にみる
他者及び自由概念との共生の可能性を巡って――

平成 24 年度入学
九州大学文学部人文学科人間科学コース
社会学・地域福祉社会学研究室

平成 27 年 1 月提出

はじめに

日々の生活の中で、シャルリー・エブド襲撃事件をニュースで見かける度に、私は強く思うことがあった。本論を全て書き終えた4日後、日本時刻にして2015年11月14日早朝、再びフランスのパリで同時多発テロが起こった。私は再び今、強く思うことがある。

テロが悪であることに疑いはなく、犠牲者の方々に心より追悼の意を捧げる私の気持ちは、世界の人々と共にある。其処に偽りはない。確かにこの事件を切り取ってみればそうなのであるが、しかしながら、この事件の前後の世界の動きには、私はどうも違和感を感じずにはいられない。

というのも、テロが「悪」だと何百回叫んだ所でこの問題が解決することはなく、その「悪」を排除する為に、彼らを「正義」の大義名分のもと皆殺しにした所で、何の解決にもなりえない。これらが生み出すのは、新たな「悪」へと繋がる怨恨と復讐の感情と、そしてこれらによる新たな犠牲者だけである。

追悼の意をメディアの力で過剰に演出することで、世界が一体となっているかのように見せかけることによって、あるいは、テロは「悪」だと叫び続けることで、彼らに対する憎悪の感情を増幅させることによって、我々は本当に他者との平和的共存が達成された社会を構築することが出来るのであろうか。

テロが悪など、そんな事は誰でも理解している。そのような議論は1度しても 100 度しても変わらない。我々が本当に向き合うべきことは、議論すべきことは、ではなぜ彼らがそのような暴力に訴える方法しか取れない状況下に追い詰められているのか、この問題を根本的に解決する為にはどうすればよいのか、これらを考える為に、テロ事件という事象だけを切り取らず、この事件の前後にあるものを、そしてこの事件の奥にあるものを、真の意味で理解することではなかろうか。

そのような想いを以て、この論を此処に記す。

要旨

本論では、シャルリー・エブド襲撃事件を切り口として、現代社会の「自由こそ至高の価値」だとする風潮に対して疑問を呈し、このことがもたらす問題について社会哲学という側面から論じている。本論の目的は、第一に、筆者が現代社会に対して抱く違和感の正体について追求すること、第二に、この議論を通じて、現代人が盲目的に自由を追求する結果生じる現実問題に対し、テロや戦争といった暴力とは異なる方法で解決するために、この議論に一石を投じることである。

序章にいては、具体的なシャルリー・エブド襲撃事件の概要と、この問題に関連して起こった世界の動きについて述べた後、この事件に対する世界の見解を、主な２つの風潮として紹介する。

第１章では、シャルリー・エブド襲撃事件が生じたその背景を分析していくことで、この問題の実態と複雑性について分析していく。また、それに対して世界の人々の理解と認識が如何に甘く偏っているかについて論じることで、筆者がこの事件を通じて抱いた現代人の感覚に対する違和感の正体について明瞭化する。

第２章では、現代人の「自由こそ至高の価値」とする感覚が自由概念を神格化しているとの仮説のもと、これに至るプロセスや要因について、従来の宗教の特徴と比較しながら詳しく分析していく。またそれにより、現代という時代の特性について迫っていく。

第３章では、具体的に「自由」という概念がこれまで変容してきた社会の中で、どのような在り方をしてきたのかを、自己と他者の自由領土をめぐる話を通じて分析していく。社会制度としては、大きく身分制度の社会、社会主義の社会、資本主義の社会の３つに分類している。

第４章では、このような現代人による自由概念の神格化や、自由を盲目的に追求することが、現実としてどのような問題を引き起こしているかを追求していく。論点は大きく３つ、１．自己の自由獲得行為がある一定の範囲を越えると、他者を侵害する行為になること、２．本来自己の自由獲得行為は、自己の幸福追求を目的としたものであるにも関わらず、現代人はこれに反転して、この行為を通じて虚無感に苛まれていること、３．自由獲

得行為によって得られた自由によって、逆説的に、我々は不自由な状況に陥っていること、である。

第５章では、これらの問題を解決するために、国際法といった法の制定による救済、あるいは、コミュニタリアニズムの思想をもとにした、倫理の面からの救済の可能性があるのかを探っていく。またそれと同時に、このような法律規制、あるいは「共通の正義」といった倫理観の統一が、現代人にとってどのような存在になり得るのかも触れていく。

終章では、これまでの論を踏まえた上で、それでは我々現代人は自由概念に対してどのように接していけばよいのか、このことについて筆者なりの持論を展開していく。現代人が自由概念と上手く向き合っていくための方法の一つとして、「求心的自由」の可能性を提唱する。

目次

はじめに

序章　　シャルリー・エブド襲撃事件

第１章　世界への違和感
　Ⅰ．　正義の衝突
　Ⅱ．　イスラムという世界
　Ⅲ．　フランスという世界
　Ⅳ．　目に見えぬ狂気

第２章　自由という名の神
　Ⅰ．　無自覚の狂信者
　Ⅱ．　預言者は誰か
　Ⅲ．　現代の聖書
　Ⅳ．　崇高なる現代人
　Ⅴ．　自由概念のメタ価値観
　Ⅵ．　神を支配する者
　Ⅶ．　宣教のプロフェッショナル
　Ⅷ．　神の二つの顔

第３章　自由の領土
　Ⅰ．　自己と他者の境界線
　Ⅱ．　身分制度における自由領域
　Ⅲ．　社会主義における自由領域
　Ⅳ．　資本主義における自由領域

第４章　破綻の時
　Ⅰ．　迷子の自由
　Ⅱ．　刹那的幸福の食後
　Ⅲ．　不自由への反転

第５章　自由への拘束
　Ⅰ．　法の壁
　Ⅱ．　見えなき壁
　Ⅲ．　第三の壁
　Ⅳ．　コミュニタリアニズムによる救済
　Ⅴ．　不可侵の誘惑

終章　　偉大から等身大へ

おわりに

参考文献・参考 URL 一覧